

神戸市獣医師会々員へのアンケート調査

調査で得られた意見等を原文まま掲載しております。従って、結果的に重複した内容もあります。

第一ピリオド

特に感じたこと：

- ・非常にナーバスでかみつくなど犬がノイローゼ状態
- ・慢性疾患の患畜が連続して死亡した
- ・診療が可能な病院が少なかったためか遠方からの来院があった
- ・電話による診療が可能かどうかの問い合わせが多かった
- ・地震による恐怖のために食事がとれない動物の症状が悪化した
- ・罹災した犬の一時預かりを依頼された
- ・外国人で被災された人に帰国するのに必要な健康診断書の記載を要請された
- ・猫が数日間帰ってこない
- ・災害の場合どうしても人間が優先となるために診療件数が少なかった
- ・家族、親類、友人、知人、近所の人々の安否が気になって何も手に付かなかった
- ・小鳥の来院が増えた
- ・診察ができない他院の患畜を数例診察した
- ・センター設立で忙しかった
- ・来院数も少ない
- ・動物をつれて避難してきた人が目立った
- ・人間のことで手がいっぱいのためか、動物の病気が重体となってから来院するケースが目立った
- ・遠隔地からの動物が多かった
- ・病院は無事であったが、オーナーが交通渋滞のため通院が著しく困難となった

震災以前に比べて、診療内容になにか変化が生じたか：

- ・避妊去勢が意外と多かった
- ・投薬の日数が増えた（交通渋滞のため）
- ・若齢犬で食欲不振、下痢、嘔吐が目立った
- ・遠方からの来院があった
- ・犬の食欲不振
- ・猫の泌尿器疾患が多い
- ・病院が診療できる状態ではなく、また診療を受けにくる動物もいなかった
- ・不妊手術が増加した
- ・来院数の激減
- ・地震による恐怖やストレスが原因の疾患が目立った
- ・大きな被害を受けたオーナーが持病を持った動物の先行きを不安に思い安楽死を希望するケースがあった
- ・内科診療で粉塵が原因の咳、神経過敏の咳、嘔吐、食欲不振を診た
- ・ストレスによる内科的疾患、神経的疾患が増した
- ・ほとんど仕事がなかった
- ・避難して来た獣医師のおかげで、以前より手厚い診療が可能になった

特に不満に思ったこと：

- ・獣医師会などが被災地の現状を全く把握していない
- ・水道が使えなくて入院用の洗濯ができないため手術ができない。治療も満足にできない
- ・避難所によっては動物を受け入れてくれないところがあった
- ・被害の大きい地域からの患畜の搬送に便宜が図られなかった
- ・行政が東灘区の被害状況を全く把握していなかったこと

- 停電で病院の中が真っ暗なために機能しなかった
- 水がないため入院舎などの掃除ができなかった
- 電話が不通なため情報収集ができなかった
- 診察機器の損傷と水の不足
- 一刻も早く一時的に動物が避難できる施設があればと感じた
- 行政の対応に大きな不満と失望を持った
- 薬品の購入に苦心した
- 給水が手間だった
- ガス、水道の復旧に1週間かかり手術などで支障があった
- 薬品と処方食の供給不足

動物の地震予知について、なにか感じることはあるか：

- 犬で数頭、猫でも数頭、地震前の異常な行動（ゆかをかきむしる、外へ逃亡するなど）を示し、飼い主もそれによって目が覚めた
- 予兆がみられたとするオーナーは半分以下であった
- 少し落ちついてからオーナーの人から聞くようになった
- 余震による動物の恐怖心
- 地震の直前に散歩を犬が要求して外出していたため難を逃れたオーナーがいた
- 地震の前、夜鳥が一晩中鳴いていたという話を聞いた
- 前日、数日前から落ちつきがなかった
- 犬が吠えたり鳴いたりした
- 押入の中から猫がでてこなかった
- 猫で地震の数時間前に暴れ出した
- 猫がいつもと違う場所で寝ていた
- 王子動物園の動物たちが動きが多かったという話を聞いた
- 犬が地震の前夜寝なかった
- 地震前日の犬の行動が普通ではなかった
- 猫で数例みられた
- 地震前日より吠え続ける犬が多かった
- 地震の数時間前から散歩をせがみそわそわしていた犬がいた
- 地震の前夜、兎が飼い主のズボンの一部を引っ張った
- 庭で放し飼いの犬が、そわそわしたり、穴を掘ったり、屋内に入りたがったり、落ちつきが無くなったりした
- 地震の3日前からビーグルが犬舎にはいらずで寝ていて、地震後に犬舎にはいるようになった
- 4、5人の飼い主より犬、猫が異常な態度をしたと告げられた
- オーナーの人から動物に変化があったとの報告を数例聞いた

第二ピリオド

特に感じたこと：

- 2月初旬、犬、猫ともに家屋やがれきの下より発見されることがあった（アルファ）
- 薬の配送が不十分であった
- 犬、猫の生命力の強さ
- 被災地から避難してきた人の来院が目立ち始めた
- 飼い主が動物を見つけたしても動物が後回しになり症状が悪化してから連れてくることが目立った
- 猫の来院数が減少した
- 震災後、行方不明になった猫が多数発見された（10－15匹）
- 電話での病院の被害状況の問い合わせ、震災前から継続治療中の患畜の投薬だけ、治療食だけの処方が目立った
- 来院数の減少
- 救護センターができてよかった
- 動物、人間ともに落ちつき普通の生活になりつつあるが余震が発生するとびくびくする
- 救護センターにおける治療が統一性を欠き継続した治療ができておらず、ワクチン接種漏れも多く、早く治療、予防方法と手順の確立が望まれた

- 余震におびえる犬が多かった
- 被災地より郊外に一時避難してきたオーナーの来院が増えた
- 救護センター設立の主旨の誤解や混乱が多々見受けられた

診療内容になにか変化が生じたか：

- レントゲン装置と生化学検査機の代替品が入り以前の病院らしくなってきた
- 下痢の患畜が多くなった
- 犬、猫のストレスが原因と思われる下痢、嘔吐、精神不安定などの症状が目立った
- 避妊去勢の手術の問い合わせがあった
- 猫の避妊、去勢の手術が多かった
- 腫瘍の手術が多かった
- センターが動き出しその仕事のために混乱していたため自分の病院の診療どころではなかった
- 自分のところの診療所の仮修理と救護センターでの治療が主な仕事となった
- 避難してきた獣医師やAHTのおかげでさらに充実した診療が可能になった

特に不満に思ったこと：

- 被災地区への物資（フード）が滞りがち
- 避難所によっては動物を排除しようとするところが増加しているように思えた。そのために動物を連れた困っている人が増加していた
- 救護物資のフードの配分にオーナー側からの不満の声を聞いた
- 罹災した動物の治療費を請求する際に何度か人間と同じように国の援助がないかどうかをたずねられた
- 獣医師会からの情報が乏しく活動状況がわからなかった
- 救護センターの活動状況が知らされたのが遅かった
- 家族や自分の病院のことなどに多忙なのに救護センターへ出動を要求されて精神的に苦しかった
- 被害状況の違う獣医師間での意識の違いに失望した
- 蒸留水や輸液類が入手しにくかった
- 救護センターの事務員やコンピューター専門の人間がほしいと思った
- 他の被災された病院の修理と復興に獣医師会から人手を出せなかったのが残念
- 過労の状態が続いた
- 自らの病院での診療が設備的には可能であったが、ボランティア活動（救護センター）に時間がとられ十分な診療ができなかった

第三ピリオド

特に感じたこと：

- 家屋が取り壊されるにつれ、子猫が発見されることが多くなり、病院ではもらい手探しの猫でいっぱいになった
- 徐々に平静になったが診察頭数の減少が顕著になった
- 罹災動物の救援の大変さを感じた
- 子犬の来院が目立った
- 子犬の来院が目立った
- 4月中旬頃から周辺地域の被災の少ないところ、またほとんど被災していないところから通常の患畜が来院してきた
- 仮設住宅からの患畜が来院するようになった
- 家屋の撤去が始まり町並みがかなり変化してしまった
- 震災が原因による異常なのかどうかわからないような症例もあった
- 通常の診療に戻りつつある
- 救護センターができてよかった
- 罹災動物がこの時期に来院するようになった
- 避難によるストレスがある動物が目立った
- 大規模な災害時に、正確な情報はもちろん健康、不健康を問わず動物を収容できる施設の必要性を感じた
- 自分の病院の周辺は平穏であった
- 被災地の病院が再会したり、救護センターの活動が定着化してきたことで被災動物の来院が減少した

診療内容になにか変化が生じたか：

- 通常に戻ってきた
- 避難するために長期間の投薬を要求された
- ストレスによる病状が悪化する動物と逆に落ちついてくる動物があった
- 腫瘍、犬の結石症、猫のF U Sが増加したように思われる
- 子犬を飼育し始める人が増えた
- 予防注射の通知のはがきを出しても戻ってくるし、持っていてもその家がなったり遠方へ移転していたりする
- 避妊と去勢が多かった
- 医療機器類が使えるようになったので診断しやすくなった
- 子犬のワクチン接種が多かった
- 避妊と去勢が多かった
- ジステンパーなどの伝染病が数例見られた
- 救護センターと自分の病院に来院する患畜に外科疾患が少なく、避難所などに引っ越すことによるストレスに起因すると考えられる内科疾患が多いように感じられた
- 避妊手術が増えた
- 被災地の病院で継続治療中であり投薬分の薬が切れているが、かかりつけの病院がしまっているので、薬を処方して欲しいという依頼が数件あった

特に不満に思ったこと：

- 震災のことが報道されなくなってきた
- 体力的な不調、変調が自分自身にもみられた
- 人間との医療料金体系の違いを感じた（動物病院は援助がなく病院自身の負担となる）
- オーナー側の勝手なところも目立ってきた
- 交通の便が悪く、外出すると夜の診療時間に間に合わない
- この時期の診療は全て無料であった。料金を支払う意志がオーナー側にみられなかった
- センターの設立で治療費が無料と思われた
- 神戸市獣医師会は被災した動物に対しては、本当によく活動されたと思う、しかし被災した会員に対してはなにもしてくれないのではないかという疑問が頭をもたげている
- 救護センターなどのボランティア活動に熱心な人と無関心な人の差が明らかになり、熱心な人の負担が大きくなってきた

地震後の動物の異常行動について：

- 地震後地震のあった同じ時間に鳴いたり落ちつかなくなる
- 余震を人より早く感じとる
- 地震後3日間犬小屋からでてこなくなった
- 地震後犬小屋に入らなくなった

兵庫県獣医師会々員へのアンケート調査

調査で得られた意見等を原文まま掲載しております。従って、結果的に重複した内容もあります。

第一ピリオド

特に感じたこと：

- 地震に対する恐れからか、悲鳴をあげたり、食欲不振を起こしたり、あるいは消化器系の疾患を起こすものが多かった
- 慢性的な内科治療中の犬、猫が罹災により症状悪化したものが数例あった
- 余震のためか食欲不振の動物が多かった
- ストレスが原因と思われる食欲不振の動物が増加した
- 病院の前の道路が被災家屋倒壊危険防止のために通行止めとなり困った
- 環境の変化が原因と思われる疾患が数例あった
- 避難してきた方々の動物に内科的な疾患が目立った
- オーナーが震災のためパニックになり安楽死を希望する人が30人いた、しかし安楽死はさせなかった
- 自宅が全壊しても動物を大切にするオーナーが多かった

- 人間の心の温もりや思いやりを感じた
- 人間も動物も精神的にダメージを受けた
- 地元の獣医師会の対応に疑問を持った
- 動物が音や振動に異常に敏感となった
- 来院数が減少した
- 人間が動物を心の拠り所にしていたように思う
- ストレスからケイレンを起こした猫が数頭いた。犬はストレスで夜鳴きするものがいた
- 親戚の動物を群部に連れ戻り、以前より飼育の健康にも留意する様になる

震災以前に比べて、診療内容になにか変化が生じたか：

- 加古川市から被災地へ行く方々が、動物を預かって欲しいとの依頼があった
- 加古川市で、震災の影響から診療頭数は減少した
- 猫は地震後3～7日間姿を見せなかったものが多く、この間の呼吸器障害の疾患が目立った
- 動物がおびえるためにオーナーから精神安定剤が欲しいという要望が多数あった
- 来院数が激減した
- 一般の人々に村して、獣医師会が自分たちの存在をアピールするのがうまくなかった
- 妊娠している犬、猫の避妊手術が増加した
- 来院件数が激減した
- 交通が不便になったために投薬だけという方が多かった
- おびえている犬が多かった
- 猫は地震後逃げてしまったために来院がなかった
- ストレスが原因と思われる消化器系の障害が目立った
- 外来が激減した
- 震災直後から来院頭数激減
- 猫の膀胱炎が増えた
- 犬の子宮蓄膿症が増えた
- 来院数が減少した
- 電話での問い合わせが急増した
- 手術の件数が減少した
- 老犬の心臓疾患が増加した
- 西宮、宝塚市から何頭か来院してきた

特に不満に思ったこと：

- 動物の救援本部は、地元ではなく近くの獣医師会連合で作るほうがよかった
- 罹災時に医薬品などを平等に配布して欲しかった
- 救護センターと同様に診療を行ったが薬品などが不足して困った
- 診療設備が破壊されたこと
- 医薬品が手に入らなかった
- 罹災した犬、猫に対してどう対応すればいいのか、獣医師会からの連絡を徹底して欲しかった
- 薬品が手に入らなかった
- 道路事情の悪化により、来院、往診がかなり制限された
- 獣医師会などがまったく機能せず、系統だった救援活動がなかったように思う
- 避難先で動物が虐待されたり、動物を預けたところでの飼育環境が悪くて病気になったということがあったこと
- 道路状況が悪くオーナーの方が来院するのが不便だった
- 薬が入手しにくかった
- 食料、水、電話に困った
- 水を運搬するのに疲労困憊した
- 医薬品が手に入らなかった
- 薬、処方食などの流通が悪かった
- 電話の不通
- 水不足で病院内の消毒が不完全

- ボランティアの獣医師の方々が遠方より駆けつけてくださったのに、受け入れ体制が整っていなかった
- いつでも動ける準備はしていたが、連絡がなかった
- 治療費について悩んだ
- 往診に行くのが大変だった
- 行政（タデのつながり）の迅速な連携のなさと、飼育者の不明の動物の各地域での対応

動物の地震予知について、なにか感じることはあったか：

- 病院所有の猫で普段おとなしいが、地震前夜にひどく騒いでいたものがいた
- 地震の直前にいぬが飼い主に甘えてつきまとった
- 犬、猫ともに予知していたと思われる話を数人の人から聞いた
- 孔雀のペアが1月15日－1月17日の未明までうるさいぐらいに鳴き、地震後の3日間はずんずん鳴かなかった
- 飼い主から数件聞いたことがある
- 猫を多頭飼育しているところでは、地震の前に部屋の隅に猫が集まっていた
- 犬が遠吠えをしていた
- 地震直前に犬が吠えたり暴れたりしたという報告を2、3人のオーナーから聞いたことがある
- 犬、猫で震災の前夜に落ちつきがなかったということを数人のオーナーから聞いた
- 震災の2日前から犬の動きがおかしいので地震がくると思い、地震に対する準備をしていた人がいた
- 犬、猫がよく鳴いたりほえたりした
- 震災前に猫がオーナーを起こしたという話を聞いた
- 震災の直前に犬がいなくなって探しに出かけたところ地震があり、自宅は全壊したが命は無事であったという人がいた
- 野良猫がまったく餌をもらいにこなくなったという話を聞いた
- 室内で飼われている猫が、震災前日に家をでて震災後戻ってきたという話を聞いた
- 入院している犬、猫が地震の前に落ちつきがなかった
- 本震、余震の度に、揺れの30秒ほど前からほえるという犬の話を聞いた
- ネズミがいなくなった
- 犬が揺れる前に騒いだ
- 猫が前日から姿を見せなかったという話を聞いた
- 犬、猫とも震災の前日に寝る場所を変えていたという話を聞いた
- 室内犬で震災の前日によくほえたという話を聞いた
- 震災の前夜、動物がおびえていたという話を数例聞いた
- 震災の1週間ほど前からネズミがいなくなった
- 犬、猫ともに家の中の安全な場所に地震の前に移動していたという話を聞いた
- 地震前に予知したものと、しなかったものの割合は同じ位
- 自らの飼育犬の約30分前からの挙動不安は明確であった

第二ピリオド

特に感じたこと：

- 行方不明の犬の問い合わせがあった
- 動物の一時預かりが多かった
- 罹災された方の場合、通常の診療や簡単な手術でも看護ができないうえに入院が増加した
- 慢性的な疾患がある犬、猫で罹災が原因によって症状悪化が数例あった
- 被災された方を受け入れた家庭の動物が、ストレスが原因と思われる消化器系の疾患が数例あった
- 神戸と兵庫に分かれて動物救護センターが活動していたことに疑問を感じた
- ストレスが原因と思われる内科的な疾患が多かった
- 慢性疾患が悪化するケースが目立った
- 水道、ガスがでなかったこと、周囲の住人がほとんど避難していたこと
- 里親の希望者が多いのに驚いた
- 徐々に通常の診療に戻りつつある
- 里親探しの相談が激増した

震災以前に比べて、診療内容になにか変化が生じたか：

- 手術が少なかった
- 中毒症状が2、3例続くことがあった

特に不満に思ったこと：

- 獣医師会からの連絡、情報などが断片的で、まったくあてにできず、個人で情報を収集しなければならなかった
- 動物救護センターの利用法がわからなかった
- 獣医師会の対応の悪さ
- ガスがでないので不便だった
- オーナーが避難しているために電話での問い合わせが多く対応しきれない
- 水道、ガスがこないこと
- 交通機関が麻痺しているために通院できないこと

第三ピリオド

特に感じたこと：

- 被災地から移転された方々の動物も診療するようになった
- 罹災動物かどうかわかりにくくなっている
- 妊娠している動物が多かった
- 粉塵が原因と思われるアレルギー疾患があった
- 野良猫が増えた
- 震災の影響と思われる肥満が多かった
- 開業獣医に対する負担が大きい
- 被災地の病院からの紹介患畜が増加した
- 三田の動物救護センターにボランティアで参加できて有意義な時を過ごせた

震災以前に比べて、診療内容になにか変化が生じたか：

- 震災の影響はかなり減少しているものと思われる
- 内科的な疾患の増加
- ストレスが原因と思われる消化器系の疾患が増加した

特に不満に思ったこと：

- 狂犬病予防の接種が例年より少ない
- いつまでもオーナーが被災者意識が抜けない
- 仮設住宅や避難先にペットを連れていけないという人が多く、オーナーと動物にストレスが多い
- 道路の交通規制のために往診にいけないこと
- 動物救護センターで預かってくれないという話を聞いた
- 三田は被災地から地理的に遠いので、オーナーに説明するのが困難であった

3) (社) 日本愛玩動物協会から

兵庫県南部地震
避難所における被災動物の状況
および飼い主等の対応に関する調査

平成7年3月30日

社団法人 日本愛玩動物協会

I 調査の概要

- 1 調査の目的
- 兵庫県南部地震による動物の被災状況を調査するため、避難所におけるペット飼養の状況を調べ、今後の被災動物の救援対策や活動等に役立てることを目的とする。
- 2 調査の内容
- 1) 避難所における被災動物の飼養状況調査（避難所調査）
2) 被災動物の行動および飼い主の対応調査（個人調査）
- 3 調査項目
- 1) の避難所調査について
(1) ペットを連れた避難者の有無と対応について
(2) ペットに関する苦情やトラブルへの対処について
2) の飼い主への個人調査について
(1) はじめから動物と一緒にここに避難したか？
(2) 避難所やその周辺、または自宅等で飼っていて、最も気をつけていることは何か？
(3) 避難所に動物を連れてきて、何かよいことが生じたか？
(4) 地震で動物はどういう状況になっていたか？
(5) そのとき、飼っている動物に対し、あなたや家族の方はどうしたか？
(6) 震災のショックによって、動物がどんな反応や行動をとったか？
(7) いまの動物の様子で、地震の後遺症と思われることが何かあるか？
(8) 動物が落ち着き、普段と同じように対応できるようになったのは、どれくらいたってからか？
(9) 今後の対応について
(10) いき思い出して、地震の前の予知行動のようなものが思いあたるか？
(11) 行政やボランティア活動で、今回の避難所における動物の救援活動に対し、何か意見があるか？

- 4 調査対象者
- (1) 母集団 下記の避難所となった418カ所と、主としてそこでの避難所生活者 61, 803人
内訳

調 査 市 区	避難所数	避難者数
神戸市 灘 区	91	21, 177
神戸市東灘区	110	20, 094
芦 屋 市	51	5, 353
西 宮 市	155	14, 815
川 西 市	11	364
計	418カ所	61, 803人

ただし、数値は調査日に入手した保健所の資料による

- (2) 標本数 避難所 68カ所

飼い主 210人（世帯）

内訳

調査市区	調査避難所数	避難者数	個人調査数
神戸市 灘区	25	17, 444	54
神戸市東灘区	18	11, 381	63
芦 屋 市	11	2, 824	36
西 宮 市	12	3, 388	50
川 西 市	2	100	7
計	68カ所	35, 137人	210人（世帯）

(3) 抽出法 ※調査市区の抽出については、できるだけ全体を反映するよう意図したが、早期調査の必要性および調査員の交通の便等をも考慮した。

※市区内の避難所は、地域的均等を勘案しつつ、できるだけ規模（避難者数）の大きい避難所から抽出した。

※飼い主への調査は、主として避難所で生活している世帯を探し、意図的選択なしに可能なかぎり行なった。また避難所近くでイヌを連れた散歩中の飼い主も調査対象に含めた

5 調査時期 平成7年2月17日～23日

6 調査方法 調査員（愛玩動物飼養管理士15人）による面接聴取

7 回収結果 避難所 68カ所（うち1カ所は調査拒否）で 210人（世帯）

内訳

避難所生活者	157人
避難所を出た人	12人
避難所に行かなかった人	41人
計	210人（世帯）

動物の飼育総数 イヌ230頭（飼い主184人）ネコ87頭（飼い主50人）

（鳥類、小動物は、標本数が少なかったので集計から除いた）

II 結果の要約

（調査は、地震の発生から1カ月後に実施したもの）

避難所調査の結果から

避難所を対象とした調査では、ペットのいる避難所が約8割あった。このうち、約7割で苦情やトラブルが表面化することなく、人と動物が共存していた。

避難所で生活しているイヌは約3分の1が「飼い主と同居」しており、ネコは約半数が壊れた自宅（ガレキの中を含む）においたままであった。

避難所に「迷わず、初めから連れてきた」イヌの飼い主が6割、ネコの飼い主は4割であった。

個人調査の結果から

地震時の動物の行動で、地震前は「室内の寝場所にいた」のがイヌで6割、ネコで7割を占めていたが、地震後の状態では、イヌで2割・ネコは5割が「別の場所に逃げていた」。

地震に対し、「非常におびえた」反応を示したイヌ・ネコはともに半数以上いた。また「地震の後遺症がある」と答えた飼い主はイヌで62. 1%、ネコでは52. 6%いて、半数を超えている。

また、飼い主が「思いあたる」地震の予知行動をとったイヌは26%おり、ネコでは39%であった。

こうしたイヌ・ネコの予知行動では、地震前に「異常にないた」がともに50%近くを占めた。その時期は、直前から数日前までと幅があり、イヌとネコの際立った違いはなかった。

III 結果の概要

1) 避難所における被災動物の飼養状況調査について

この調査は、避難所の責任者もしくは同対策本部のリーダーに聞き取り調査した。

(1) 約8割を占めるペットのいる避難所

調査した67の避難所のうち、ペットを連れて避難者がいるところは、56カ所あり、約8割を占めている。一方、いないところは、11カ所であった。

ペットがいない11カ所について、さらにくわしく状況をみると、5カ所は最初から避難所へのペットの持ち込みを禁止したところであり、残り6カ所は、避難した当初はペットを連れて避難者はいたが、調査時点ではすでに退去していなかった。

ペットのいる避難所 83. 6%	いない避難所 16. 4%
------------------	---------------

標本数68（うち1カ所は調査拒否）

(2) ペットのいる避難所の約7割で 苦情やトラブルが表面化せず共存

ペットに関する苦情やトラブルの発生の有無や対処法について、ペットのいる避難所56カ所の状況をみると、人と動物との共存状況は、「苦情やトラブルが表面化せず」共存している非難所が約7割を占めた。

避難所での人と動物との共存状況	件数	割合
A 責任者やリーダーが対処し、比較的うまく共存している（いた）	7	12. 5%
B 苦情やトラブルがとくに表面化せず、共存している	41	73. 2%
C 苦情やトラブルは当事者同士の話し合いを原則に共存している	5	8. 9%
D 苦情やトラブルが表面化し、対応に苦慮している	3	5. 4%
計	56カ所	100 %

Aについては、避難所の責任者やリーダーが、動物好きの人（ペット連れ世帯）と動物嫌いの人について、早い時期から配慮し、校舎の上下階とか教室等の部屋割りに生かして、住み分けがうまくいっているケースが多かった。

この中には、学校長が「やむをえずペットを連れてきている」ことや「動物たちも、この大震災を人と共に生き延びた生命なのだから、差別することのないよう、大事にしましょう。」などと、校内放送で直接、避難者に呼びかけ、これらを契機に苦情もなく、共存しているケースが2例あった。また、ペット連れの家族同士の話し合いで、校舎や体育館等には入らず、自発的に校庭で避難生活して、未然にトラブル等を防いでいるケースが1例あった。

Bは、もっとも多かったケースで、責任者やリーダーが「ペットに対する配慮はしていないが、とくに苦情が持ち込まれたり、トラブルも聞かない」と答えた避難所である。さらに「避難所に動物の嫌いな人もいようだが、何とか我慢している、あるいは我慢せざるをえない、といった状況だと思う」と答えたケースも含まれている。

個々の飼い主への聞き取り調査によって、このケースで比較的問題もなく共存しているのは、個々の飼い主が周囲への気遣いやペットの管理にとくに注意を払っていただけでなく、飼っているイヌやネコ自体が、おとなしくて人に馴れ、またよくしつけられている事例が多かった。

Cのケースは「動物飼養についての苦情は、当事者同士で話し合って解決してほしい」という方針をとっている避難所である。こうした避難所ではほとんどの場合、これまでに何度か、苦情が避難所の対策本部に持ち込まれていた。主な苦情の内容は、なき声がうるさい、嫌なニオイがする、不衛生である、などがみられた。

Dは、ペットを飼っている人と動物嫌いの人とのトラブルが深刻化し、避難所の対策本部のリーダーが解決に苦慮していた。中には動物アレルギーの人とペットを飼っている人たちとの間にトラブルが発生し、責任者の判断でペットを飼っている人たちを全員、避難生活45日目に避難所から退去させることになったところが1例あった。

※飼っている場 所 イヌは避難所で「飼い主と同居」が約3分の1、
ネコは壊れた「自宅」が約2分の1

飼い主（避難所生活者のみ）への聞き取り調査の集計から、現在ペットを飼っている場所についてみると、イヌでは「避難所で飼い主と同居」が37. 0%と3分の1を占め、ついで壊れた「自宅」が19. 7%、「テントの内外」17. 9%、「避難所の屋外」が14. 5%の順となって

いる。

一方、ネコは壊れた「自宅」が57. 5%と約2分の1を占め、「避難所で飼い主と同居」は25. 5%となっている。（有効標本数157、飼育頭数はイヌ173頭ネコ87頭）

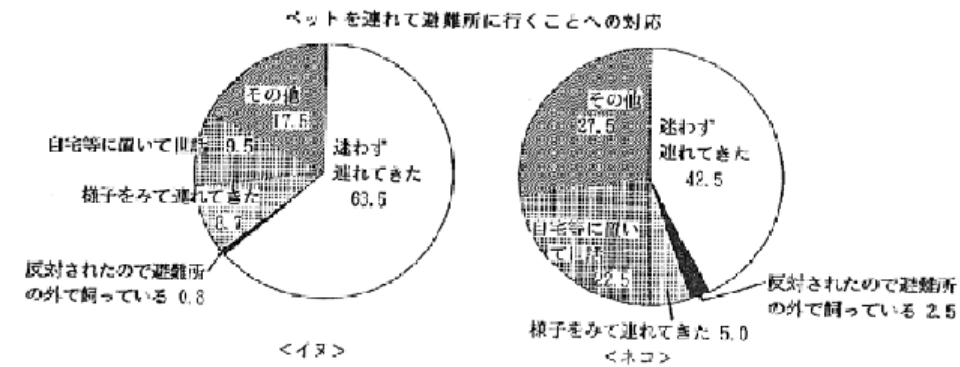
現在飼っている場所	イヌ	ネコ
避難所で飼い主と同居	64 (37. 0%)	22 (25. 5%)
避難所内の廊下など	2 (1. 2%)	0 (0%)
避難所の屋外	25 (14. 4%)	2 (2. 3%)
テントの内外	31 (17. 9%)	1 (1. 1%)
車の中	2 (1. 2%)	0 (0%)
動物病院	0 (0%)	4 (4. 6%)
自宅（ガレキの中を含む）	34 (19. 6%)	50 (57. 5%)
親戚友人宅等	13 (7. 5%)	2 (2. 3%)
行方不明	1 (0. 5%)	6 (6. 9%)
死 亡	1 (0. 5%)	0 (0%)
計	173 (100%)	87 (100%)

2) 被災動物の行動および飼い主等の対応調査について

この調査は主として避難所生活者でペットを飼っている人を対象に行なった。

- (1) (調査項目 避難所に「迷わず、初めから連れてきた」
- 2) - (1)) 飼い主はイヌで6割、ネコは4割いた

はじめから動物と一緒にここに避難されましたか、という質問に対し、「迷わず、初めから連れてきた」と答えたイヌの飼い主は6割を占めた。これに「反対されたので避難所の外で飼っている」と「様子をみて連れてきた」を含めると、避難所にイヌを連れてきた飼い主は全体の7割を超える。一方、ネコの飼い主でも「迷わず、初めから連れてきた」は4割でもっとも多かった。また、比較的多かったネコの「その他」について内訳をみると「行方不明だった」が多かった。（有効標本数 イヌの飼い主137ネコの飼い主40）



- (2) (調査項目 地震後の動物の状態は
- 2) - (4)) 「別の場所に逃げていた」がイヌ2割でネコ5割

地震前の状態では、イヌの居場所は「室内の寝場所にいた」が60. 0%でもっとも多く、ついで「庭の犬舎にいた」が15. 9%であった。「その他」の内訳では「飼い主と一緒に寝ていた」「玄関につないでいた」などが多かった。

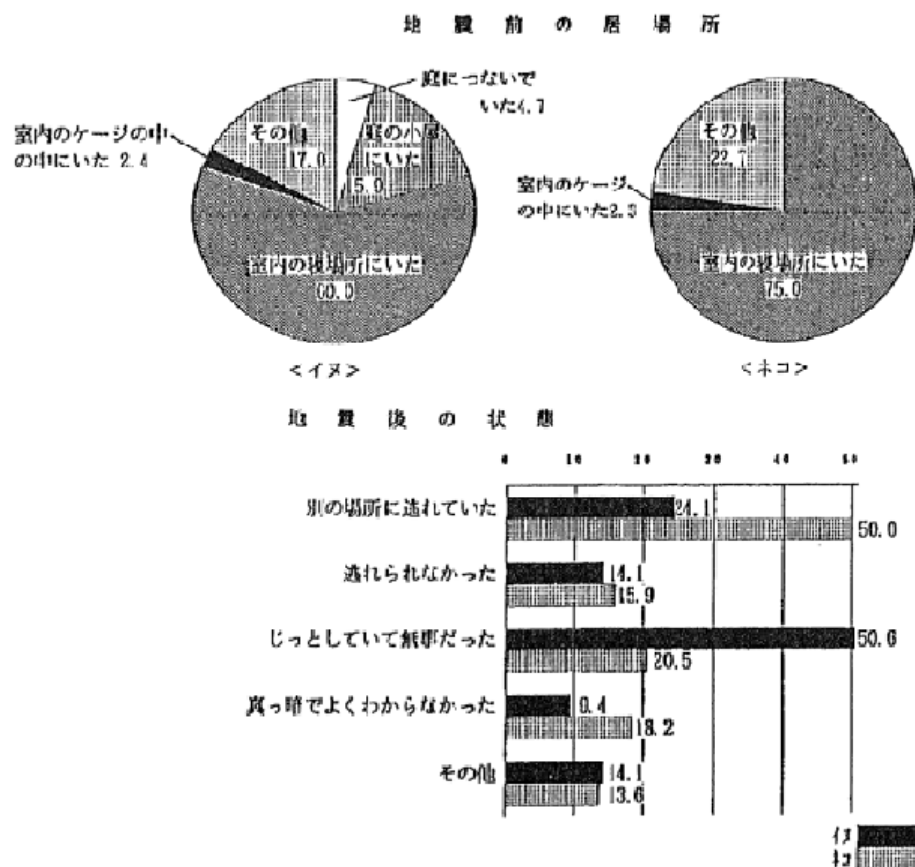
ネコでは「室内の寝場所にいた」が75. 0%と圧倒的に多かった。「その他」の内訳では「飼い主と一緒に寝ていた」が多かった。（有効標本数イヌ170ネコ44 数値は飼い主の数 ただし複数飼育で各個体ごとに記録できた場合はその数も標本数に入れた）

地震後の状態（複数回答）では、イヌでは「じっとして無事だった」が50. 6%でもっとも多く、ついで「別の場所に逃げていた」

24. 1%、「逃げられなかった」14. 1%の順であった。「その他」の内訳では「倒れた家具やガレキの下にいた」がもっとも多かった。ネコでは「別の場所に逃れていた」が50. 0%でもっとも多く、ついで「じっとして無事だった」20. 5%であった。

「別の場所に逃れていた」はイヌで2割、ネコは5割を占めている。

(複数回答 有効標本数 イヌ170 ネコ44)

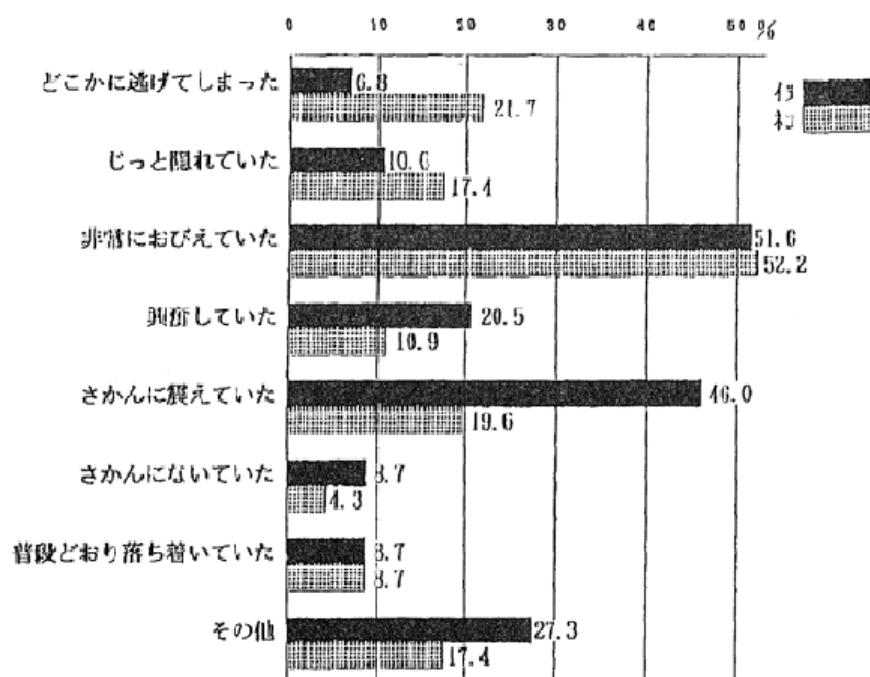


(3) (調査項目 2) - (6) 地震に「非常におびえていた」イヌ・ネコが半数以上いた

地震のショックによって、動物がどんな反応や行動をとったか聞いたところ、イヌ、ネコとも「非常におびえていた」と答えた飼い主がイヌで51. 6%、ネコで52. 2%と共に半数以上いた。イヌではついで「さかんに震えていた」が46. 0%と多い。ネコでつぎに多いのは「どこかに逃げてしまった」で21. 7%を占めている。

(複数回答 有効標本数 イヌの飼い主161 ネコの飼い主46)

地震に対する反応



(4) (調査項目 2) - (7) 半数を超えるイヌ・ネコに、震災の後遺症

動物の様子で、地震の後遺症と思われることが何かあるか聞いたところ、イヌでは62.1%、ネコでは52.6%の飼い主が「ある」と答えた。

(有効標本数 イヌの飼い主161 ネコの飼い主38)

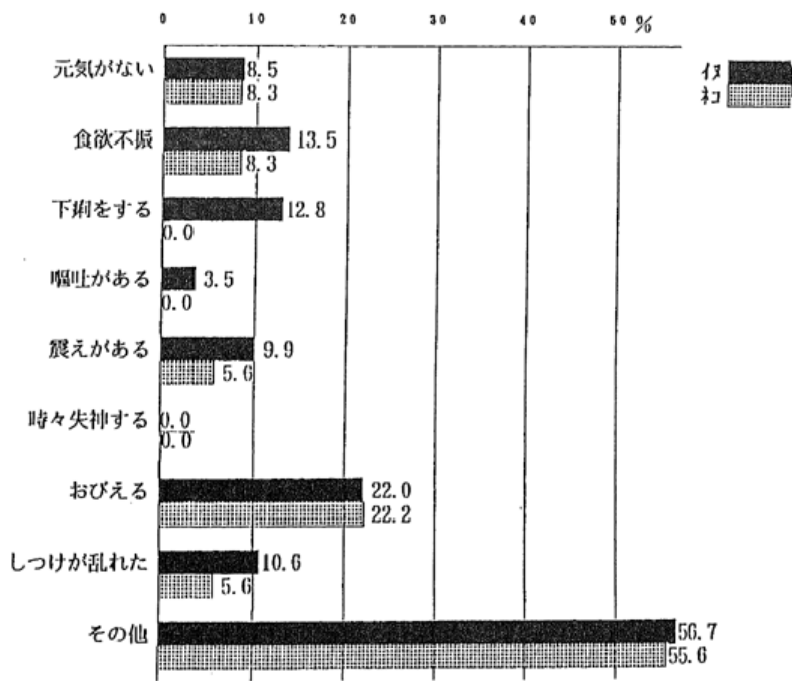
「ある」と答えた人に、さらに詳しく聞いたところ、イヌでは「おびえる」が22.0%、「食欲不振」13.5%、「下痢をする」12.8%の順となった。おびえるの内訳は「物音や見知らぬ人に対して」というのが圧倒的に多かった。

また、56.7%と最も多くを占めた「その他」の内訳は、イヌの行動に関するものがほとんどで、「飼い主のそばを離れたがらない」「元いた居場所を恐がる」「よく吠えるようになった」「不意に触ると恐がったり咬んだりする」「便秘になった」などであった。さらに「しつけが乱れた」の内訳では、排泄のしつけが多かった。

一方、ネコの場合は、「おびえる」が最も多く、22.2%、「元気がない」と「食欲不振」が8.3%と同じ割合であった。また「その他」が52.6%と半数を超えているが、その内訳は「異常がなく、元気である」が最も多く、あとは、便秘ぎみになった、ストレスでやせた、トイレを失敗する、などがあつた。

(複数回答 有効標本数 イヌの飼い主100ネコの飼い主20)

イヌ、ネコが示す後遺症の内容



(調査項目 2) - (6) 余震におびえると答えた飼い主はイヌで70%、ネコでは53%いた。

余震に対する反応について聞いたところ、おびえると答えた飼い主はイヌで70.8%、ネコでは52.9%いた。反対に「とくにない」または「普段どおり」と答えた飼い主はイヌで29.2%、ネコでは47.1%であった。

(自由記入欄有効標本数 イヌの飼い主96 ネコの飼い主17)

おびえる内容についてみると、イヌでは、震える、興奮しておろおろする、寝ていてもパツととび起きる、恐がって飼い主のもとにかけよる、などであった。一方ネコでは、パツと身がまえる、恐がってふとんに潜り込み、二度ほど失禁した、などであった。

興味深いのは、この中に余震の予知行動を示すイヌが4例、ネコは2例あったが、このうち、いずれも半数の飼い主が本震では「気づかなかった」と答えているので、学習による行動とも考えられる。

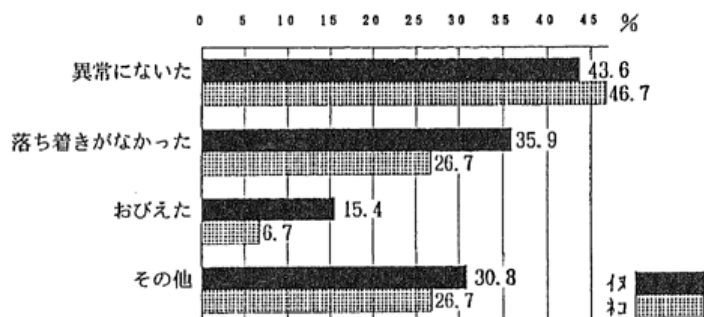
(5) (調査項目 2) - (10) 飼い主が「思いあたる」予知行動をとったイヌは26%、ネコは39%いた

いま思い出して、今回の地震で動物の予知行動のようなものに、何か思いあたることがあるかどうか聞いたところ、「思いあたる」と答えた飼い主は、イヌで26.2%あり、ネコでは39.5%あった。(有効標本数 イヌの飼い主149 ネコの飼い主38)

「思いあたる」者に対し、「どのような」行動を示したかについて聞いたところ、「異常に鳴いた」がイヌは43.6%、ネコでは46.7%と最も多く、ついで「落ち着きがなかった」はイヌで35.9%、ネコでは26.7%となっている。

(複数回答 有効標本数 イヌの飼い主39 ネコの飼い主15)

飼い主が「思い当たる」イヌとネコの予知行動



また「思いあたる」と答えた人に予知行動を示した時期について聞いたところ、イヌについては地震の「直前」が23.1%、「数分前」

17.9%、「数時間前」2.6%、「一日前」28.2%、「数日前」23.1%と分かれた。ネコは26.7%、13.3%、13.3%、20.0%、26.7%となり、イヌとの際立った違いはみられなかった。

(有効標本数 イヌの飼い主39 ネコの飼い主15)

飼い主が「思い当たる」予知行動の時期

